

# 糸のまち岡谷の姿を求めて —子どもたちとの学習活動—

岡谷蚕糸博物館 専門指導員 林久美子

岡谷蚕糸博物館では、毎年、(独)農業生物資源研究所のご協力をいただき、年3回春蚕・夏蚕・秋蚕の養蚕を行い、地域の子どもたちとの学習活動を展開しています。

学習は、養蚕・製糸・工作・歴史学習と多様な活動を組み合わせながら、学年や先生の要望に応じて行っています。

この稿では、カイコに始まるさまざまな学習活動をご紹介します。

## (1) 養蚕

### こんにちは、おカイコ様

カイコは生まれて1週間ほどの3齢のカイコを配布します。「きゃあ、小さい」「カワイイ」「気持ち悪い」など、初めてカイコを見る子どもたちの反応は様々です。

桑の葉の与え方、世話の仕方などを話しながら、子どもたちにはだんだん「自分がカイコのお父さんお母さんになったつもりで飼う」気持ちが湧いてくるようです。



初めて見るおカイコ様に、こわごわ、ドキドキ

かつて生活の中に養蚕があったこの地域では、事前の学習で家の人から「おカイコ様と言う」ということを聞いてくることが多々あります。昆虫である虫に「お」と「様」を付けること、その謎解きの答えは、飼育を続ける中で子どもたちのテーマとなります。

### 昔の人はスゴイなあ

桑を摘んだり、カイコの世話をしていると、子どもながらに「もう少し楽な方法はないかな」「早く便利にできないかな」などと、養蚕について考え始めます。

そういう時こそ、学校の資料室にある養蚕道具を使って飼育する絶好の機会です。昔の人たちが使った養蚕道具には、今、自分たちが感じている不便さを改善する知恵や工夫が溢れています。その使い方がわか



桑こき器を使うと、桑取りもこんなに簡単!

ったとき、子どもたちからは大きな驚きと歓声が湧き上がります。まさに歴史から学ぶ瞬間です。

## 戸惑う家族の協力

カイコの世話は毎日行います。週末は家庭へ持って帰りますので、ご家族の協力も大切です。最初、カイコを持って帰ると聞いた今どきのお母さんたちの驚きは想像に難くありません。

「最初、子どもからカイコをうちに持ち帰ると聞いたとき、私はどうしようかと思いました。何より私はムニョムニョ動く虫が気持ち悪く、嫌いだからです。その日は子どもが帰って来る時間になるまでドキドキしていました。

ところが、私の心配をよそに子どもは『私がお世話するから、お母さんはいいよ』とハッキリ言いました。それどころか、大切そうにカイコに向かう我が子の姿は、親である私が初めて見る頼もしい姿でした。その姿に押されて、私も恐る恐るカイコを眺めていると、なんとも言えず、一生懸命桑を食べるカイコの姿が可愛く思えてきました。今では、この週末もカイコを持って帰ってくるかなと楽しみになってきました」

「週末、黒部峡谷へ泊りがけで遊びに出かけましたが、カイコを置いてゆくことができず、カイコも車に乗せ、一緒に黒部峡谷へ連れて行きました」

ご家族の方からも、このような驚きと戸惑いと喜びに溢れたさまざまなお手紙をいただきます。子どもたちに寄り添い、ともにカイコの飼育をしていただいていることを感じています。

そして約1ヶ月が過ぎ、カイコが糸を吐き始め、繭をつくります。子どもたちの感想からは、繭づくりが楽しみでもあり、また寂しくも思える様子が聞かれます。立派な繭ができた子どもたちの姿は誇らしげでもあります。



こんなに繭になったよ！

## 命の学習

繭づくりを終えたカイコを前に、子どもたちが突き当たる問題は、この繭をどうするか、ということです。

そのまま蛾にして卵を産む姿を見たい、可愛い繭工作をしたい、などクラス内でも意見は分かります。しかし、どのような形にしても、繭をそのままにしておくことはできません。

卵を産んで生を全うさせても、次に生まれる何千頭ものカイコを育て続けることは無理です。かといって繭で何かを作るにしても、繭のまま命をそこで止めてしまわなければなりません。生きとし生けるものを飼う宿命に、子どもたちは迷い、戸惑い、悩みながら、「いただいた命を違う形に変えて大切に作る」という結論に至ります。

子どもたちの前で、蛹を見せるために私がカッターで繭を切ろうとしたときのこと

です。カッターの刃を繭に向けたとき、女の子が目をキュッと強くつむりました。何人かの子どもが「アアッ」と言って顔を横にそむけました。

命あるものに向かってきた子どもたちの真摯な時間と思いは、とても愛おしいものです。そして、そのような学習を終えた子どもたちは学年を問わず、蛹を見ても決して「気持ち悪い」とは言いません。「この蛹がいたからこそ、この繭がある」と、子どもたちの目は私に伝えているようでした。



子どもたちのカイコの絵。

## (2) 製糸—糸取り体験

### 昔ながらの道具を使って

繭から生糸をつくる製糸業は日本の近代化を支えた一大産業であり、岡谷を中心とする諏訪の地は日本一の生糸生産地でした。その歴史を踏まえ、カイコを育てたあとは、昔ながらの道具を使って繭から生糸ができる様子を体験する学習に展開します。

煮た繭をみご箒で撫でて糸口が出ることに驚く子どもたち。そして、道具を使ってクルクルと糸が繰られていく様子は、学年を問わず、糸のできる不思議さと相まって、楽しさいっぱいです。

昔ながらの糸取り道具は、胴繰り・牛首・座繰りといった、明治時代以前の「手挽き」と呼ばれた糸取り道具です。それぞれの道具で実際に繰糸体験をすることで、器械自体の歴史的変遷、技術的工夫、向上点などを実感することができます。また、より良い道具を開発してゆく知恵や工夫もまた体感することができます。これは、ものづくりの精神にも繋がるものです。

繭糸が終わった時に糸を足す接緒という作業技術は、製糸工場で働いた工女さんたちの貴重な技術です。その様子を実際に見て、体験することができる足踏み式繰糸器の体験は、糸のまち岡谷ならではの貴重な体験です。



「こうやって糸を足していくんだ～！なるほど！」

新岡谷蚕糸博物館では、宮坂製糸所が博物館に入り、実際に稼働する製糸工場の見学が可能となります。昔ながらの道具を使っての糸取り体験とともに、産業としての製糸業を目で見て、また繭を煮る匂いを感じ、糸枠の回る音を聞きながら、五感を使って製糸業そのものを体感できる貴重な経験となることでしょう。

### (3) 繭をつかって

#### 繭工作

自分たちが育てた繭を使って作る工作も、子どもたちの楽しみの一つです。子どもたちなりの想像力に任せ、いろいろなものを作ることができます。また、旧山一林組製糸事務所の2階にある「まゆちゃん工房」でも同様の工作は可能です。

以下に1例をご紹介します。

- ・パンダ、カエル、うさぎなどの動物
- ・繭を使ったしおり
- ・繭の鈴つきストラップ
- ・コロコロ動く繭人形

など、繭の肌触りを直接感じながら、その可能性は無限に広がります。



子どもたちがつくった鈴のストラップとコロコロ動くまゆ人形

#### ランプシェードづくり

糸取り体験の後、糸取りと同じように紙コップに糸を巻き付けながらつくるランプシェードもあります。

これは、1人10個のまゆを使いますが、自分で糸口を出し、蛹が出てきて繭が終わるまで、1500m近くの繭糸を巻き取り続けます。

繭の間に色紙や飾りを挟み込んで、まさにオリジナル、世界に一つだけの自分のランプシェードを作り上げます。

紙コップから抜いたランプシェードは、生糸の輝きを放ち、糸の間から洩れ出した優しい光りは、心まで温めてくれるような気がします。



ランプシェードづくり



子どもたちのつくったランプシェード

## 卒業にむけて

岡谷市内の小学校では、卒業式の自分の胸に付けるコサージュ(花飾り)を、自分たちが育てた繭で手作りする学校があります。

カイコを育て、岡谷の歴史を学び、日本の歴史の中で製糸業を位置づける学習を行った子どもたち。そこには、日本一の製糸業のまちに生まれ育った誇りを胸に、岡谷の小学校を卒業するという心意気が伝わってきます。

一つとして同じものがない自分だけのコサージュは、どれもとても素敵です。そして、卒業式の後には、そのコサージュを、今まで育ててくれた親へプレゼントするというサプライズが待っています。親たちの目からは、卒業式が終わってもまた涙が溢れます。

カイコは脱皮を繰り返し次のステージへ上がっていく生き物です。脱皮の前には少し休んで力を蓄え、脱皮をしてダブダブの皮に包まれたその身は、また桑の葉をムシヤムシヤと食べて大きくなり、いずれ美しい繭をつくります。



まゆを薄くはがしながら、コサージュづくり



卒業式での様子。子どもたちの胸にコサージュが輝く

3月、卒業という一つの節目を超えて、次のステージへと進んでゆく子どもたち。4月からちょっと大きなブカブカの制服を着て進級する子どもたちの姿が、懸命にカイコ飼育に取り組んだ姿と重なるようです。

## (4) 歴史学習

岡谷市にある製糸業関連の遺構 15 件は、平成 19 年経済産業省の近代化産業遺産として認定されました。これらの近代化産業遺産群を巡るまちなみ探検や、パネルなどを用いて、昔の写真を見ながら、今と昔とを見比べる学習もあります。

また、製糸業が発展する過程で、地域の発展に貢献した人物を調べたり、日本の歴史の中で製糸業を捉えたりといった、歴史学習は、今、暮らしている地域を改めて見つめ直すきっかけとなります。

これらの学習を、子どもたちが自ら考え、自主的に行うことで、ふるさとに対する新たな気づきや発展が生まれることでしょう。



まちなかを歩いて巡る近代化産業遺産めぐりの様子

## まとめ

以上、岡谷蚕糸博物館の学習活動の一部をご紹介しましたが、カイコに始まるこれらの学習は、養蚕・製糸・工作・歴史学習など、それぞれ単独での学習はもちろんのこと、年間を通しての活動にもなります。

学習指導要領に沿って学年に応じた学習の展開や、総合・社会科・理科・国語・図工など教科の枠を超えて、先生方と学習を組み立てています。そして、子どもたちはその時、その時に新たな発見や気づきをしながら、この学習とともに成長して欲しいと願っています。

ある時、カイコを飼って様々な学習を終えたクラスの1人の男の子が「生（なま）の糸」と書いた黒板の「生糸」という文字を見て言いました。

「ああ、だから生糸は、生きる糸と書くんだ！すごいなあ」と。それを聞いたクラスの子どもたちが、「ホントだ。いろんなものに生きる糸だよね」「今までだって生きてきた糸だよね」そう口々に言いました。

カイコに始まるこの学習の中で、学習してきた事が全て子どもたちの役にたったり、

完璧に覚えていられるということは大変なことでしょう。

しかし、いつかの日かふるさと岡谷の事を思い出すときに、糸のまち岡谷のことを誇らしく思ってもらえるような小さな種まきを、この学習活動を通じてできればいいなど願っています。

また新博物館が開館した後、より学習活動を発展させていくために、今後は、川上から川下までといった、カイコから織物までをトータルで学習できるプランニングを進めて行きたいと考えています。